

ビジネスタイプがようやく離陸 中小企業向けメニューを新投入

2005年4月に大きな期待を込めて市場投入した「ひかり電話ビジネスタイプ」。提案の試行錯誤などが続いていたため、12月ごろまでは伸び悩んでいた。だがそれも解消に向かい、導入が加速し始めた。

「立ち上がりこそ悪かったが、“ひかり電話ビジネスタイプ”は2005年度後半になって、ようやく導入が進み始めた」。NTT東日本/西日本の法人向けひかり電話の主管はこう口を揃える。

NTT東西の法人向けひかり電話は、03年10月に「法人向けIP電話サービス」の名称でスタートした。だが、「100チャンネル(回線)まで8万4000円」という基本料金設定に加え、「メトロイーサ」や「アーバンイーサ」等の100Mbps帯域保証型イーサ系光アクセス回線を利用するサービスだったため、中堅規模クラス以下の企業ユーザーにとっては敷居が高かった。

そこでNTT西日本が05年3月28日、NTT東日本が同4月1日から提供条件を引き下げるとともに、サービス名を「ひかり電話ビジネスタイプ」に変更して再リリースした。

NTT西はイーサ系の回線に加えて新たに「Bフレッツ ベーシックタイプ」での利用も可能にし、月額基本料を1チャンネルごとに840円とした。光

アクセス1回線当たりの最大利用チャンネル数は、Bフレッツ ベーシックタイプの場合は30、10Mbpsイーサネットは90、100Mbpsイーサネットは600チャンネルとした。

NTT東は、ビジネスタイプ用のBフレッツ新メニューとして「Bフレッツビジネスタイプ『ひかり電話ビジネスタイプ』対応」と、「Bフレッツ ベーシックタイプ『ひかり電話ビジネスタイプ』対応」を追加。月額料金は4チャンネルまで3360円を基本とし、それ以上は1チャンネルごとに840円を加算する形にした。1回線当たりの最大利用チャンネル数は、Bフレッツが100。イーサネット回線の場合は

10Mbpsが90、100Mbpsが600チャンネルとなっている。

ともに導入パターンは、既存のレガシーPBXおよびビジネスホン利用型、IP-PBXおよびIP対応ビジネスホン利用型、IPセントレックス利用型の3つがある(図1)。

投資効果が見出せない

前述のように、ひかり電話ビジネスタイプの出足は鈍かった。NTT西日本・BBアプリケーションサービス部IPコミュニケーションサービス部の吉川祐司担当課長によれば「スタート当初は、月に数ユーザー・数十チャンネル規模だった」という。その後、導入は徐々に増えたが、05年12月くらいまでは「低空飛行」という様相だった。

個人向けの「ひかり電話」は、積極的な宣伝効果もあり、両社とも05年

図1 ひかり電話ビジネスタイプの利用パターン

